

『新釈』

金太郎きんたろう』

作者

浅羽一

昔々、今となっては何と言ったか忘れられた山の麓に、小さいながらも平和な村がありました。そこに暮らす人々は皆温厚で、真面目に田畑を耕して細々と生活をしていました。しかし、そんな村人達にも一つだけ悩みがありました。それは、秋や春、作物を収穫する時期になると決まって山から下りてきて作物を荒らす、熊の事でした。

ただでさえそれほど裕福でない村です、熊に襲われて米や野菜を奪われてしまえば、村人達の生活は一層に苦しくなってしまうます。だけど、人間なんかよりも遙かに力が強く凶暴な熊に、争い何てしたことのない村人達が敵うはずありませんでしたから、結局、彼らはいつも「作物が育つのも、熊が出るのも、みんな山の神様の決めた事だから」と諦めてしまっていました。

けれど、ある年の事、その地方一帯をそれまでに一度も無かつたくらいの長い日照りが襲いました。池の水は涸れて、山の草木はしおれ、せっかく畑にまいた種もまるで芽を出さず、とうとう飢えのせいで病気になってしまいう人が村の中にも数多く現れてしまいました。しかも、その上さらに難儀な事に、おそらく山の中でも木の実などが採れなくなったのでしよう、飢えた熊がたびたび村にやってきては辛うじて残っている米や家畜を襲うようになりました。

村長はほとほと困り果てました。このままでは、村は近いうちに滅びてしまう事でしょう。

すると、そんな村長に村に暮らす男の一人が言いました。「村長、村長。どうだろう、山に住んでいる金太郎に頼んでみては」。

「何、金太郎だと？」。村長は男を見返しました。

男は真剣な顔で言いました。「ああ、そうだ。ただでさえ雨が降らずに大変なんだ。せめて熊だけでも金太郎に退治して貰おうじゃないか」。

途端、周りにいた他の村人達も「それが良い、そうしよう」と一斉に頷きました。

金太郎とは、山の頂上の家に住んでいる青年で、とてもとも力が強いと評判の人物でもありました。何せ、噂によれば、赤ん坊の頃から大の男と相撲を取っては投げ飛ばして、誰も金太郎に勝つことが出来なかつたと言うくらいです。そんな力持ちの金太郎なら、もしかしたら熊にも勝てるんじゃないだろうか、村の面々は期待しました。

「よし、このままじっとしていても状況は悪くなるばかりだ。この際、金太郎に頼んでみようじゃないか」

そして村長は村を代表して金太郎に熊退治をお願いしに行くことになりました。

次の日、村長は山を登り、金太郎の家へとやって来ました。それは大きな木を幾本も使って建てられた、大層立派な家でした。

村長は分厚い門の前に立って、大きな声で「金太郎や、金太郎や。どうか儂の頼みを聞いてくれんか」。

「これは誰かと思えば、麓の村の村長じゃないか」。やがて門を押し中から顔を見せたのは、良く鍛え上げられた体に赤い腹掛腹掛けを着た、いかにも健康そうな若者でした。真っ赤な腹掛けの真ん中には、大きく「金」と、金の糸で刺繍がしてあります。

「ああ、金太郎。実はな、お前さんの噂を聞いて、一つ頼みがあるのだ」

「ほうほう、それは一体どんなものだね」

村長は金太郎に事情を説明し、「どうだろうか、金太郎。お前さんなら熊でも退治出来

るだろうか」と尋ねました。

果たして金太郎の返事は「そんなもの、おやすいご用だ」と言うものでした。

「何と、頼みを聞いてくれるのか」

「困った時はお互い様、この金太郎が村に迷惑を掛ける熊を見事に退治してくれよう」

「これはこれは、何とも頼もしい言葉。いやはや、これで村も安泰だ」

金太郎に快く熊退治を引き受けて貰えた村長は、意気揚々と村へ帰り、村人達にそのことを報告しました。みんなはとても喜んで、これは金太郎に感謝しなければならぬなど、心から金太郎のことを褒め称えました。

それから数日後、相変わらずの水不足の中でも、心配事が一つ減ったおかげで気分良く仕事に励めていられた村人達の前に、ひよつこりと金太郎が現れました。しかもその背後には、巨大な熊を載せた台車がありました。あれほど好き勝手に暴れ回っていた熊は、もうピクリとも動きませんでした。

「どうだ。これでもう熊に村が襲われる事も無いだろう」

金太郎は村の入り口で堂々と胸を張り、誇らしげに告げました。

すると、突然の事に驚いていた村人達も、これでようやく熊の恐怖から解放されたのだと大喜びして、「ありがとう、ありがとう」と口々に金太郎に礼を言いました。

村長もまた金太郎に深々と頭を下げました。「これで村も何とか生き延びる事が出来そうだ。金太郎や、本当にありがとう」。

金太郎は少しだけ照れ臭そうに「何の何の、大したことじゃない」と笑いました。

そして彼らは一緒になって笑い合いました。この時ばかりは、綺麗に晴れ渡った青空に文句を言う人間はいませんでした。

「それじゃあ、村長」

と、ひとしきり愉快な時間を過ごした後で、金太郎が村長に言いました。「さっそく、熊退治の料金を支払ってくれ」。その顔はやっぱり楽しそうでした。

村長達は驚きました。「何、料金とな」。

金太郎は皆のその反応にこそ驚いた風に、「当たり前だろう」と返しました。

「ちよつと待ってくれ、金太郎。これは、好意でしてくれた事ではないのか」

「勿論、頼みを引き受けたのは好意だ。しかし、誰もタダでやってやるとは言っていないだろう」

「それはそうだが」。村長は困りました。何せ貧しい村です、料金と言われても払える金などろくにありません。

「金太郎や、申し訳ないのだが、儂らにはそんな余裕などないのだ」

正直に告げた村長に対して、金太郎は呆れた表情を浮かべました。「それは困る。きちん料金を払って貰えないと、この者達に金を支払ってやることも出来ないからな」。

金太郎の言葉が終わるやいなや、彼の背後の森から数人の男達が一斉に現れました。その手には皆、猟銃を構えています。

「その者達は一体、誰なのだ」と、銃口を向けられた村長は震える声で尋ねました。

金太郎は平然と答えました。「熊を退治してくれた猟師達だ」。

「何だと。それでは、お主が一人で熊を退治したのではないのか」

「当たり前だろう。熊と喧嘩をして勝てる人間が何処にいますか」

「しかし金太郎、お前はとても力持ちなのだろう」

「ああ、そうだ。誰も俺には逆らえん。なぜなら、俺はこの辺りでも一番の金持ちだからな」

それから金太郎は真面目な顔で「所詮、この世で一番の力は、金だろう」と言いました。

「さあ、村長。早く金を払ってくれ」

「待ってくれ金太郎。俺らは生きていくのがやっとで、とてもそんな余裕は無いんだ」

「いやいや、俺もこの猟師達も、生きて行かねばならないのだ。どうしても払わないと言うのなら、力づくで貰っていくことになるぞ」

金太郎の言葉に、猟師達が無言で銃の引き金に指をかけます。

もう村長に抵抗することは出来ませんでした。しかしかといって残り僅かな作物を渡し、てしまうわけにもいかず、彼は迷った末にこう提案しました。「それでは、どうだろう。

これから出来上がった作物の内、一割をお主に献上するようになる。それで何とか勘弁して貰えないだろうか」。それはとても厳しい条件でしたが、熊のせいで農作物の二割が駄目になっていたことを思えば、まだ許せる範囲でした。

果たして、金太郎は即答しました。「三割だ」。

村長達は目を丸くしました。それでは、熊に襲われていた時よりも村は貧しくなってしまう。

けれど金太郎はもうそれで決定だと言わんばかりに頷くと、周囲の猟師達に向かって「それじゃあ、帰るぞ」と告げました。猟師達は無言で頷き、熊を載せた台車を引いて山の奥へと入っていきます。

と、彼らに続いて去っていかうとした金太郎に、悔しげに唇を噛んでいた村長が思わずと言った感じで発しました。

「この悪党め」

対して、振り返った金太郎は冷めた口調で「力も持たない弱虫よりはよっぽどマシだ」と言いました。

村長は何とも言い返せませんでした。

すると金太郎は最後に改めて、「所詮この世は、金だろう」と言い捨てて、去っていき、ました。村人達はもう、呆然と彼を見送ることしか出来ませんでした。

こうして貧しい人々を尻目に、熊を退治した金太郎は、さらに力を付けて成長し、いつしかその国でも一番の大金持ちになったと言うことです。